

情報の表現方法が印象形成に及ぼす影響

—悪印象は覆せるか—

0907062

高橋 桃

【目的】

吉川（1989）は、はじめの印象の好ましさを被験者間要因とする実験を行った。その結果、刺激人物に対する悪印象は好印象よりも覆しにくく、持続しやすいことが明らかとなっている。

本研究では、同じ人物の同じ性質によって行われた行動の結果を表しているながら、印象の好悪は全く異なる刺激文を用いることで、情報の表現方法が印象形成に及ぼす影響を検討する。

Kelley（1950）の実験結果は、事前の情報が会った時の印象だけではなくその人との実際の間人間関係にまでいかに大きな影響を及ぼしているかを明らかにしている。従って、事前情報としてネガティブな表現で与えられた悪印象を覆せるかを知ることは、対面後の人間関係を推測する上でも重要であると考えられる。

以上から、本研究では「最初に受けた説明から悪印象を得ると、その悪印象を覆すことはできない」という仮説を立てて検討を行う。

【方法】

2012年11月中旬に質問紙調査を実施した。回答に不備が無かった大学生および短期大学生89名（男性17名、女性72名）を分析対象とした。質問紙はポジティブ条件用とネガティブ条件用の2種類を作成した。ポジティブ条件用は「行動⇒結果1（ポジティブ結果）⇒結果2（ネガティブ結果）」の順に、ネガティブ条件用は「行動⇒結果1（ネガティブ結果）⇒結果2（ポジティブ結果）」の順に刺激文を提示した。各刺激文の提示後に刺激人物に対する印象評定をさせ、計3回の評定を行わせた。

各印象評定は、林（1978）の特性形容詞尺度からは是永ら（2008）を参考に12項目を選択し、1～7（7に近いほどポジティブ）で評定させた。

【結果と考察】

各条件の分析対象者数は、ポジティブ条件が47名、ネガティブ条件が42名であった。分析では、是永ら（2008）で得られた「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「力本性」の3因子をそのまま採用した。

まず単独結果情報による印象変化について検討した結果、社会的望ましさ及び力本性において、ネガティブ条件の方が単独結果情報による印象変化量が大きかった。ネガティブな刺激文では社会的な責任感の無さが強調されているため、ネガティブ結果の刺激文の方が社会的望ましさの印象に大きな影響を与えたと考えられる。力本性については、行動の刺激文から比較的好印象を持っていたため、ポジティブ結果の刺激文を読んでもそれ以上好印象を持つことはなかった可能性がある。

反対結果情報による印象変化についての検討を行った結果、社会的望ましさおよび力本性においてネガティブ条件の方が反対結果情報による印象変化量が少なかった。この2因子の結果は、悪印象は覆しにくいという吉川（1989）の結果と一致するものであった。

そして刺激文を独立変数、ネガティブ条件の印象評定値を従属変数とした分散分析を行った。その結果、3因子すべてにおいて、ネガティブ結果の印象評定値が低くなり、悪印象の持続による影響よりも先行情報から得られた印象に対する後続情報の影響が強く表れたことが示唆された。また、社会的望ましさで、ポジティブ結果の印象評定値が行動の印象評定値よりも低かった。従って、ポジティブ結果で悪印象が完全に覆ったとはいえず、この点では仮説が支持された。

本研究では仮説が支持された部分があったものの、悪印象の持続による影響よりも、先行情報から得られた印象に対する後続情報の影響が強く表れたことも示唆された。しかし、刺激提示から数日経ってからの印象評定も行うことで本研究とは異なる結果を得られる可能性がある。また、より多くの刺激文の検討も行いたい。本研究で用いた刺激文以外にも「同じ人物が同時に持つ性質を表す文章」はたくさんあると考えられるためである。

（指導教員 豊村 和真 教授）